

「生物的時間の復権を」宇野 直人

三月の震災後、各方面で、被災地の方々に心を寄せつつ、今後に向けて新しい価値観・社会観を樹立しようとの提言がなされている。その論調はおおむね、これまでの“効率、金銭、競争”に価値を置く風潮を見直し、別のところに人生の充足感を見出そう、というところにあるようだ。日本は今、大きな転換期に入ったと言える。

P・F・ドラッカーは既に十年前に「日本はこれから転換期に入る。転換期にあつて重要なのは、基本と原則とを確認することだ」と言っている。では、いま確認すべき「基本と原則」とは何か。その一つとして挙げられるのは、人が本来持っている筈の“生物的時間”ではないだろうか。

本川達夫氏によれば、動物の生息密度や行動圏は、その体の大きさによって決まり、そこから固有の時間感覚が育まれる。ゾウにはゾウの、ネズミにはネズミの、人には人の時間感覚がある。つまり、時計に表示される“物理的時間”とは別に、動物の種類ごとに、体のサイズに応じた“生物的時間”があるわけだ。

ところが人の場合、生物的時間の感覚は先史時代と変わっていないのに、社会のシステムが複雑になるにつれ、生活、行動、それに伴う時間感覚は、本来のものからどんどん離れてゆかざるを得ない。その傾向が極度に強まり、数々の病弊を生じているのが現代の社会ということになろう。

たとえば、人は移動する際、二本の足を使って歩く。目の障害物は手で取りのける。ぬれた手は乾いた布で拭く。自分の意見や想念を記録するときは、手と指の運動によって書きしるす。これらの基本的動作と、それにかかる手間暇とが、人の生物的時間の感覚の基盤をなす。が、現代の社会は“動く歩道、自動ドア、温風乾燥機、パソコン”などの利器によって、そうした基本的動作をさえ剝奪しようとしている(これらの利器がいずれも電気を使うというのも示唆的だ)。

数々の文明の利器は、人の生活を便利に、効率的にした。また、それらを全く排除して暮らすのが不可能であることはもちろんである。しかし半面、それらが人間本来の生物的時間の感覚をゆがめ、精神の健康を損ねていること、そのことへの顧慮がこれまで足りなさすぎたことも否めまい。

こんなことを考えるようになったのは、最近、SPレコードを聴く習慣ができたことがきっかけである。すなわち、SPで音楽を聴くと、LPやCDで聴くとき以上に、曲の楽想や構造が鮮明に頭に残るのである。SPは一分間に七十八回転の円盤で、片面三、四分しか収録できないから、長い曲になると、曲の途中で盤を裏返し、さらに次の盤に交換しなくてはならない。再生針もせいぜい二面トレースすれば摩耗するので、これもひんばんに付け替えることになる。CDはもとより、LPに比べても格段に手間がかかり、効率が悪い。その上、肝腎の音楽がしばしば中断されるのだから、満足のかゆ音楽鑑賞はとうてい期待できないように思える。ところが事実は逆であった。

これはなぜかと言うと、どうやら、人間の集中力の持続時間が三、四分とされることによるらしい。これも生物的時間の

感覚として、われわれの遺伝子に組み込まれた能力の一つであろう。そして、これはSP片面の収録時間と一致しているのだ。つまりSPを聴くとき、人はその片面を、本来もつ集中力をフルに傾けて聴き通す。盤や針を交換する時間は、聴き終えた音楽を脳裏に定着させ、かつ次の集中に向けて心身をリフレッシュする準備の時となる。この繰り返しで全曲を聴くので、LPやCD、或いは実演の場合に比べてさえ、曲の内容が濃密克明に印象づけられる、という次第である。LPやCDは手間が省け、効率がよくなった分、大切なものを失ったことになる。

おそらくは他にも、効率の悪いこと、手間暇のかかることが、かえって人の能力の十全な発揮を助けている事例は少なくないだろう。基本とすべきは“効率の良さ”ではなく、“人の生物的時間にかなっていること”。SP聴取の体験は、このことを如実に感じさせたのである。